令和6年度第1回 オーテピア高知図書館サービス計画推進委員会 議事概要

1 日時：令和6年6月13日（木） 9:30～12:00

2 場所：オーテピア 4階 研修室

3 出席者：

［委員］加藤委員長、篠森副委員長、齋藤委員、常世田委員

［オーテピア高知図書館］杉本高知県立図書館長、髙石高知市立市民図書館長 ほか

4 議事次第

（1） 開会

（2） 議事

①オーテピア高知図書館サービス計画の取組状況について

［資料1・2・3］

②行政支援サービス及び児童サービスについて

［資料 2・3］

③その他

［資料5］

【委員】

議事1について、委員の皆様のご意見をいただきたい。

【委員】

●レファレンス件数の減少について

資料2の年間入館者数は順調に伸びている。令和5年度は92万人以上ということで大変喜ばしい。令和8年の目標値に向かって順調に伸びており、来館者数は問題ないと思う。基本的に、来館者が増えると貸出冊数が増え、質問、インフォメーションも含めて、レファレンスも増えるのが普通の傾向だが、貸出冊数はそれほど伸びていない。心配なのはレファレンスの件数が低下していること。これは危険な兆候で、貸出しの内容が趣味・娯楽系に移行して、働き盛りの方の利用が減っているのかもしれない。オーテピアの重要なコンセプトは、大人のための図書館で、課題解決型であり、働き盛りの方に利用されること。これはもう何度も話題に挙がっているが、児童と高齢者だけでは、貸出冊数や来館者数も含め、利用実績が伸びない。

利用実績を伸ばしている図書館に共通していることは、働き盛りの年齢層の利用実績を伸ばしているということ。レファレンスが減るというのは、少し危険な兆候だと思う。レファレンスの内容について、資料2の2ページにレファレンス受付の分野別の棒グラフがあるが、レファレンス全体の減少に比べて、ビジネス系の減少が著しい。オーテピアには、地域の商店街の活性化も含めた、地域経済の課題解決という大きなコンセプトがあるので、このあたりは非常に心配なところ。

●県庁所在地の自治体における図書館利用状況の分析について

次に、私が最近、毎回話をしている、高知市民に対する利便性の向上というテーマ。高知県の人口の半分くらいは高知市なので、県民の利便性向上と、高知市民に対するサービス提供は、ある意味重複していると言えると思う。

そこで、市民に対するサービスの向上についてのエビデンスを何か作りましょうという話をここ何回かしてきたが、皆さんから資料が出てこないので、私が作った県庁所在地統計という資料をもとに少し説明をさせていただきたい。

この資料は、日本図書館協会が毎年出している『日本の図書館』という統計資料の電子版の数値を写したもの。北海道から沖縄まで県の登録番号順に並んでいる。コロナの影響があると通常の分析ができないので、コロナの影響のない2018年のデータで作った。

項目の一番左側、県庁所在地の貸出数は、基本的には（県庁所在地の市立図書館の）貸出冊数の数字で表を作っている。

北海道や埼玉県、千葉県の3つのうちの2つなどが＊印になっているが、これらは県庁所在地以外に都道府県立図書館があるところで、県庁所在地での比較を考えて、省略した。

その右の項目は、都道府県立図書館の貸出数。高知の場合、県市が一緒なので一番左が県市合計の貸出冊数になっている。他の自治体、例えば、神奈川の場合は、県庁所在地貸出数は横浜市立図書館の貸出冊数で、その右の都道府県立貸出数は（横浜市にある）神奈川県立図書館の貸出冊数になっている。

その右の項目の県立％は、県庁所在地の市立図書館の貸出冊数と、県庁所在地にある都道府県立図書館の貸出冊数の合計に対する都道府県立図書館の貸出冊数の割合を出した。少し無理はあるが、県庁所在地の市立図書館の貸出冊数と、県庁所在地にある都道府県立図書館の貸出冊数の両方を足した数がその地域の住人たちが利用している数と想定している。すぐお気づきになるように、実際は、県外や市外から来る方もいるので、そのあたりの扱いが資料の作成に際して悩んだところではないかと思う。一般的にこの問題は、少なくとも私の知る限りでは、これまで全く研究論文などがなかったと思う。

県庁所在地に都道府県立図書館と市立図書館の両方が存在する場合、その自治体の利用者がどのくらいの利便性を受けているかという研究はほとんどないということ。県外からも来ているのではないか、正確な数は分からないのではないかということで、何となくそのままになってきてしまっている。

普通は、その自治体の図書館しかない。例えば、浦安市には浦安市立図書館しかないので、浦安市の利用率はすっきりと出るが、県庁所在地に県立図書館と市立図書館が並立している場合は、その自治体の正確な市民の利用率はなかなか出ず、研究もそのままになってしまっている。けれど、考えてみれば非常に重要なことで、そこでどのくらいの利便性が生じているかを本当は分析しなければいけないので、今回は、県庁所在地の都道府県立図書館と市立図書館を合算して、それを高知では高知市の人口で割るという形で数字を出した。県立％の右側に県庁所在地人口がある。高知市であれば2018年当時33万2000人。その右の人口当たり貸出数は、県庁所在地の都道府県立図書館と市立図書館の貸出冊数を合算して県庁所在地の自治体の人口で割った数字。高知の場合はそもそも合算になってしまっているので、それを単純

に割った。これを見ていただくと、高知は1人当たり6．4冊。今、全国平均で1人当たりは大体5．5冊ぐらい。以前は6冊台だったが、徐々に低下して、今、5．5冊前後と言われている。高知はそれよりは少し高いので、全国平均よりは高いといえる。先ほど話したように、県外から来る人、あるいは在住や在学の人ではなくて、図書館を目的に市外から来る人もいるので、実際はこの数字よりは幾分低いだろうということになる。47都道府県の中で、県庁所在地に都道府県図書館がないところを除いた数字で並べかえると13位。単純集計したこの数字では、比較的上位に位置する。私としては、一安心というか、オーテピアができたことによって県域全体での利用実績が上がり、県域全体に対する影響力が出てきているということが、ここ何年かで実証されている。また、高知市民に対する利便性も向上しているのではないかということが推測される。

その次が市町村立全体貸出数で、これは県域全体でどのくらい貸し出されてるかという数値。こちらは都道府県によって人口がかなり違うので、人口当たりで計算する必要があり、市町村立100人当たり貸出数がそれに当たる。先ほどの県庁所在地の自治体の人口のように実数で出したかったが、数値は電子版からコピーしていて、元のデータが100人当たりになっているので、100で割ると分かりやすい。

括弧の内と外の数値については、滋賀県は全く同じで、何の違いか分からないが、大体の数値はお分かりいただけるかと思う。こちらは47都道府県全ての数値が出ており、高知は上から30位。高知県内の市町村立図書館全部の貸出冊数を県の人口で割った数値であり、かなり上昇してきているが、もう少し市町村立図書館の支援をしてアップさせていかなければいけないと思う。高知県の人口の半分ぐらいが高知市に集中しており、その人たちの利用実績はかなり上がってきているので、県民半分に対しては、平均以上のサービスをしているであろう。しかし、残りの半分の人たちに対しては、まだ全国平均に達してないのではないかという状況が見えてきているのかなと。

バタバタで作ったので、数値が少し違っているということが後から出てくるかもしれないが、大筋でそういうことが見えてきた。先ほど話したように、県庁所在地の市民がどのくらいサービスを受けているかは、在勤・在学者以外の県外、市外の利用者がいる以上、正確な数値はなかなか出ないという問題があるので、登録のときに在勤・在学か、そうではないかなどの区分けをして、コンピューター上でもう少し正確な統計が取れるようなアプリを組む必要があるかもしれない。

個人情報を単純にしろという指示が上の方から来ていて、そういうことがやりづらいということであれば、定期的にアンケート調査を行って、市外あるいは県外の利用者が何％ぐらいかということを明確にした上で、利用実数を割合で分けていって数値を推定する手法をとる必要があるのではないかと思う。図書館情報学の立場から見ても、県庁所在地の市立図書館と都道府県立図書館が並立してる場合のサービスの量的あるいは質的な分析はほぼ行われていないので、重要なテーマだと考えている。

●展示やイベント等を通じた情報提供について

次に以前、少しお聞きした気もするが、イベントや展示の担当はどうなっているのか。以前は

ある程度規模の大きな図書館になると、講演会、研修会、映画会、音楽会等のイベントやいろいろな展示を一手に引き受ける事業担当者が、児童サービスやレファレンスからは独立して配置されていた。担当者は担当者なりに、世の中で起きていることや市民のニーズを考えながら、事業の計画を立てていくということをよくやった。オーテピアではどうなっているのかを後ほどお聞きしたいと思う。

以前は、レファレンスは今のように盛んではなく、図書館の担当者は貸出しと児童サービスぐらいにしか分かれておらず、その中で事業、イベント、展示と担当が分かれていても別におかしいことではなかった。今のように課題解決型サービスという概念はなかったから、大人に対するサービス、貸出しをしていれば良くて、貸出しは小説が中心だったりしたため、イベントはイベントで考えれば良いということだったと思う。

最近は、オーテピアの事業実績でも明確なように、ビジネス支援、それから、健康・安心・防災、あるいは法律情報の提供等の様々なテーマが生まれてきている。

ビジネス、防災、医療・健康など、年間を通じて世の中では様々なことが起きている。例えば、インボイス制度が施行されれば、中小企業は大変なことになってしまうので、ビジネス支援としては、インボイス制度についての情報を提供したいと思うだろう。医療保険の制度や病院、医療関係の法律が改正されて病院の制度が変わる、あるいはコロナが5類に移行するとなれば、健康・安心・防災の担当者は、関連した情報提供をしたいと思う。ところが、従来のようにイベント担当が別になっていると、担当者がぼうっとしていれば関連したイベントは行われないので、以前のような事業担当者は廃止して、医療、ビジネス、法律等の各分野の担当者が、時宜にあった事業を展開することが必要なのではないかと思う。つまり、図書館の組織のあり方を変える必要があると考えているところ。これは、皆さんも感じていらっしゃるのではないかと思う。

一般的な市町村立図書館のイベントや展示を見ると、世の中の情勢や市民のニーズを全く理解していないと思える例が大変多い。簡単に言えば、毒にも薬にもならないようなイベントや展示をやっている図書館が少なくない。特に、民間委託されている図書館、指定管理を受託した企業は、何かトラブルが起きれば次の入札のときに影響が出るので、トラブルが起きないようにしている。従って、例えば、安倍政権のアベノミクスが本当に効果があったかというような展示は絶対にやらない。地雷を踏むような展示は絶対しない。何の展示をやっているかというと、冬になって寒くなったので、体を温める料理を作りましょうとか、夏になれば熱中症にならないように、冷たいものを食べて、涼しいところへ行きましょうとか。

周りの図書館の展示やイベントを見ると、今までそういう図書館が多かったので、市長も市議会議員の方も、大部分の市民の方も違和感を感じない。図書館はそんなものだろうと。町の端にあって、この嵐のような大変化が来ている世の中に背を向けて、癒しの空間みたいになっているのが図書館だろうとみんな思っている。そういう図書館で探偵小説ならこういうのがありますよとか、あまり有名でない作家を呼んで講演会をやるとか、そういう毒にも薬にもならないようなイベントをやっている。不思議なことに図書館の講演会というと、（講師は）ほぼ100％作家。図書館は、全方位的な情報提供機関であるのに、なぜ図書館の講演会となると（講師が）作家なのかとても不思議。市町村立図書館の講演会というと、（講師は）圧倒的に作家（が多い）。児童サービスといえば絵本作家が来るみたいな感じで。

2023 年度中に問題になったこと、重大ニュースをネットでいろいろと調べてみた。
臓器あっせん事件。これは闇ビジネスや臓器移植の問題、海外からの闇バイトのルフィという切り口。
オリンピックの談合事件。こういう不正がこの先進国で行われている、あるいは五輪をそもそもやるべきだったのかというような切り口。
H3ロケットの打ち上げ失敗。膨大なコストをかけている一方、宇宙産業という国際競争があり、アメリカの民間がどんどん宇宙産業をやっているという切り口で、市民にいろいろと情報提供する必要もあると思う。
日韓首脳会談。これは韓国の大統領が代わってから、日韓関係が変わっているので、こういうことについても、北朝鮮も含めて大きな切り口でいろいろと展示やイベントができると思う。
岸田首相がウクライナを訪問した。
文化庁が京都に移転した。文化行政はどうなのか。
電力カルテルの問題。電力事業の問題も含めて、寡占化の問題の切り口。
陸上自衛隊のヘリが事故を起こした沖縄の基地の問題。それから、自衛隊の問題。
日銀の総裁が代わったこと。景気、デフレ、公定歩合の問題などのいろいろな切り口。
岸田首相が爆発物を投げつけられた。これは安倍元首相の話もあれば、統一教会に関連する気づきもある。
コロナが5類に移行した。
G7が広島で開催され、ウクライナの大統領が来たことも含めての切り口。
マイナンバーカードでトラブルが続出。図書館として提供する情報がたくさんあったと思う。
ガーシー（前参議院議員）逮捕。
株価が33年ぶりに3万3000円を超えた。物価が上がったり不景気な実感がある中で、なぜ株価だけ上がるのかということについて、市民が知りたいというニーズがあるのではないか。
陸上自衛隊が訓練中に発砲した事件。
LGBT法が改正、施行された。
ビッグモーターの不正。保険の問題などの切り口があった。
日大アメフト部の大麻問題。これは大学の管理、若年層のドラッグ、体育会系の問題という切り口があったと思う。
原発の処理水放出。これは風評問題もあれば、中国・韓国との間の外交問題もあるし、そもそも原発はどうなのかという切り口。
デパートでのストライキ。これは確か30年ぶりのストライキと言われた。先進国で異常にストライキが少ない日本。国際的に言うと異常な国だということがはっきりしたという切り口。
猛暑の問題。温暖化の問題もある。様々なことがあったので、ぜひ図書館のイベントの検討にあたり、考えていただければと思う。

【委員】
●レファレンスサービスと課題解決支援機能について
先ほどの話にもあったが、5年間のサービス計画の真ん中の年という観点からすると、レフ

ァレンスの数については、目標との乖離がだんだん大きくなっているという印象がなくもない。それは、レファレンスサービスがどうということではなく、ネットが非常に盛んになって、簡単なことはネットで調べることができるようになったということ。多くの方は、資料の目次を見て数ページだけ読めば済むような話については、図書館まで来て本を探すとか、レファレンスサービスをお願いするという段階までいかない。それをするぐらいなら、ウィキペディアをひっくり返したほうが早いという調べ方の転換がネットワーク社会であるというのが個人的な印象。皆さんには釈迦に説法になるが、パスファインダーをひっくり返したり、レファレンスサービスを受けたりする非常に難しい課題については、オーテピアの出番だと思う。そうであれば、レファレンスサービスを高水準で維持するには、来館される方に、ちょっとやそっとでは解決しない難しい課題を抱えていただく必要がある。

そういった意味で、通常のレファレンスだけでなく、先ほど、イベントの話などの重要なご示唆もいただいた。列挙していただいたような話題に関連する話や、もっと端的に言えば、例えば、インボイス制度の特集等であれば、中小企業や個人事業者の皆さんは、インボイス制度を導入せざるを得ないとなれば、必ずゴールまで行かないといけない。そういった難しい課題であれば、レファレンスやパスファインダーは非常に有効ではないか。

防災についても、資料1にあるように、オーテピアでBCPを策定したということであれば、民間も含めた団体に、BCP作ってみませんかといったことを紹介する。関連の書籍もたくさんあるので、時流に沿ったとまでは言わないが、先ほどのトピックス的なものに積極的にチャレンジして、それがイベント等の中でさらに関連団体との連携を生み、レファレンスにつながるということも、少し検討する必要があると思った。

それから、今の事柄とも関係するが、このように膨大な冊数（の資料）を持っていることの意義は、使い古された言葉になるが、ロングテールという言葉に見出だせると思う。みんなが読むような本だけを並べるのであれば、小規模の図書館でも良い。年間に1回貸出しがあるかどうかという本を、じっと出番を待つように置いてあるというあたりが、大きな図書館の利便性の鍵なのではないかと思う。そのような一般的には非常に使われにくい、詳細かつ専門的な本が必要なときには、非常に強力な図書館であり、そのあたりのものをうまく登場させられるようなレファレンスなり課題設定に向かったら良いと思う。

ビジネスの関係で言えば、スタートアップやベンチャーなどの形もあるが、日常的な業務についても改めて見直しをしていただくのが良いと思う。

高知県労働委員会事務局の方の活用事例がマンガにもなっていた。マンガ（の内容）に限らず、人事担当者のようなレベルでは、今日的な課題がたくさんあると思う。例えば、従業員のLGBTなどへの対応をどうするかなど。資料を充実させながら、専門的な本がそれほど多くないようなところでニーズの掘り起こしができれば、レファレンスも普及していく可能性が大きいと思う。

それともう1つ、これは高知県図書館協議会・高知市立市民図書館協議会では主流（の話）になっていないが、電子書籍が順調に一定数伸びている。そこに対応するレファレンスが進展していくことになれば良い。電子書籍を家で読めるということは素晴らしいと思う。そこでレファレンスの話にうまく接続できるか、次の本と言われたときがレファレンスの出番なのかと。そう

いった意味で、課題先取り的なイベントと、非常に専門的な本も含めたレファレンスに展開できたら目標に向かっていけると思った。

【委員】
●防災について
　今年の1月1日は能登の地震で始まった。オーテピアの防災について、資料1の取組状況の欄にあるが、既に能登地震から半年経っている。例えば、石川県の図書館と何らか連絡を取り合って、防災という観点から、もしくは図書館が災害時に何ができるかという点で、実際に何をされたのか、どれができていないか、また、現在は復興時なので、いつ何をされているか、というレポートを何とか入手していただきたい。
　また、4月には宿毛で地震があった。宿毛の坂本図書館からも同じように情報をいただき、オーテピアは避難施設でもあるので、今後どうすべきかを考えてみては。
　一番の問題は、復興時に、図書館が物理的な問題よりもメンタル面、知的欲求をどうやって満たすのかということであり、そうした問題へのヒントになるような調査をできる限り早くしていただいた方が良いのではないかと思う。今年起こった事例なので、今から少しでも調査していただいて、今後の我々の活動のヒントになるものを見つけていただけたらと思う。

【委員】
●予算について
　気になったのが図書館要覧の19ページ、当初予算の概要。事情を知っている方は、高知県立図書館のR5年からR6年の予算の変化について、非常に頑張っておられるという印象を受けると思うが、初めてこの予算を見た方には、図書資料購入費が3分の2になったとしか思われない書きぶりになっている。大丈夫かという声があるのではないかと思い、少し計算したところ、電子書籍の KinoDenに予算がついてすごく増えた分が通常運転に戻ったというだけで、大台は維持している。問題なく通常運転に戻ったと書き加えたほうが安心されるのではないか。逆に言うと、4千何百万円もの特別予算が元に戻っているのに、全体では1千万円しか減っていない。県議会にもご理解いただき、県のほうも努力された結果として必要な経費が予算化されているということであり、たいへん前向きな感じがするので、イメージだけの問題にはなるが、そこは説明を添えていただいた方が良いと思う。
　特に、市民図書館は非常に分かりやすくなっているので、そちらとの対比という意味でも、ひと言書き加えておいたほうが良いと思う。

【委員】
●サービス計画全体の進捗状況について
　まず資料1と資料3の感想。非常に短い文章でまとめているが、読み応えがあった。読み応えがあったというのは、当たり前の話だが、資料1では、これまで出てきた意見に対する取組として挙げている内容が前向きに考えられており、できるもの、できないもの、今進めるべきこと、そうでないことが、短い文章の中で読み取れる。そこで読み取れるということはいい加減な扱

いではなく、きちんと検討されてやっていることが、この中から伝わってくるという意味。短い文章だが読み応えがあったと思う。

資料3の方がその感じはますます強いと思った。全体を見て、ものすごく大ざっぱな話をすると、オーテピアのサービスが完成段階にかなり近づいてきているという印象。もちろん課題があって、今後の取組が進められたらということにはなるので、今現在で完成したとまでは言わない。だが、この3月までの取組に新しいものも入れられて充実していることが、成果と課題のところで出てきている。その分析の内容も、何ができたかということだけでなく、それが何につながったとか、どこと連携することによってメリットがあったということまできちんと把握した上で今後の取組が位置付けられている。それから、成果と課題については、今まではどちらかというと、現場の単一的な視点で書かれている内容が多かったが、今回読ませていただいた中で、距離を取るという言い方が正しいかどうか分からないけれど、近くからでは見えないようなことも、少し距離を置いて他のモノが視野に入ってくる状況で、この成果と課題を分析されているのは、職員の方の仕事に対するモノの見方が成熟してきているのではないかと受けとめた。

そういったことも含めてベースができつつあり、今後の取組が整理されていて着実に進められていくということであれば、その先にあるのはかなり成熟したオーテピアのサービスということになるだろう。以前から言っているが、我々がやってきたことの中で、こういうことが完成していてそれがこういう成果を産んでいるということを、県内だけでなく全国の図書館業界に向けて出していくべき時期に入っているのだろうと思ったのが全体的な感想。

●資料・情報の提供について

個別の感想として、資料3の1ページ目に外国人材（戦略）に関することや常設展示の新設が赤字で書かれているが、この辺りのモノの流れ方が先ほど申し上げたことを実感させる内容だと思う。こうしたことは、自分のところだけでやろうと思ってもできない。行政だけでなく、団体などいろいろなところと協力・連携してやっている。そういった連携をしていく中で、相手に協力させることによって、我々が提供できるメリット、図書館と組むことのメリットを相手にも組織としてしっかりと理解させる。担当同士でこれをやってくださいということで終わりではなく、あちらの組織とこちらの組織が相互協力することによって、単純に展示ができた、あるいは、資料を収集して並べたというだけではなく、報道で取り上げられるなど、もうワンランク上の効果が出せる。それをお互いの組織が理解することによって、図書館と協力することで生まれる効果を実感していただいたのではないのかと思う。

そういった点で、仕事の仕方が習熟してきていることを感じた。報道で取り上げられるという言葉も出てくるが、全体の話として、もうやられているかもしれないが、新聞やテレビで取り上げられたことをどう記録してどう見せていくのか。1回1回の新聞記事がこうだったと見せるだけでなく、例えば、今年1年間で高知新聞に何回、テレビに何回取り上げられたという数字的な資料を持つことにより、行政や議会に対してかなり強力な武器ができてくると思う。それぞれの内容を1行で良いので一覧表のようにして作り、「見てください」と言えば、あらゆる分野で報道されていることが分かるし、そこに先ほど言った、例えば、連携先なども入れていくと、

図書館はこんなにいろいろなところと仕事をして、県市の事業や今やらなければいけないことについて、マスコミにこれだけアピールする能力を持っていることを理解してもらう良い材料になるのではないかと思う。

県外や市外の議会からどのくらい視察に来たかという資料を作り、議会に見せたりすることも必要だが、マスコミがどのぐらい取り上げてくれたかは、かなり大きなポイントで、行政はどちらかというとそちらに反応する。行政の中でも、上に行けば行くほど反応が良いはず。自分たちのところでやっている内容が報道できちんと取り上げられ、みんなに知ってもらえるということに対する反応は、知事や市長の方が担当部局よりも良いくらい。これから予算や定数などを守っていくための武器として、そういったことを準備しておくことがあっても良いと思う。

●情報リテラシーの向上支援について

次に、情報リテラシーについては、いろいろな段階のところに様々なものを提供していることが非常に良いと思った。それから、パスファインダーが順調に増えている。情報を得る方法も我々は提供しているし、その一つのツールとして、パスファインダーについても、充実あるいは更新という形でもっと役に立つものが増えてきていることが良いと思った。

●ビジネス支援サービス、健康・安心・防災情報サービスについて

ビジネス支援サービスは、「コテピア」という名前がおもしろい。（ここへ来るまでの）列車の中でちょっと笑ってしまった。

それから、健康・防災は、展示や医療関係のイベントを外部と一緒にやることによって、医療関係者から喜ばれるというあたり。館内だけでやるのではなく、外に出ていくことによって、主催者サイドにも図書館が出ていくことのメリットをきちんと理解してもらう。それは組織的にお互いこれから先も続けていくことにつながると思うし、ここに書いているように、展示本を連携先とともに選ぶといったことが、単純に私たちが持って行きました、見てもらいました、何人か来てくれて登録してもらいました、嬉しかったですといったことだけでなく、お互いの力をお互いが利用しながらもっと良いものをやろうという形でできているというあたりも、仕事の仕方が習熟してきたという感じ。

●高知県関係資料について

高知は何でこんなに（NHKの）朝ドラに強いのか。『らんまん』で相当受けただろうと思うのに、今度は「やなせたかし」さんが取り上げられ、高知市、南国市、香美市あたりは朝ドラ関係でものすごくメリットがある。こんな機会をもらえる場所は全国でもほぼないぐらい。『らんまん』の取り上げられ方も良かったし、多分、今度の『あんぱん』にしても、相当良い感じのイメージで、高知のイメージをがんがん上げてくれるような感じでやってくれる。それについて、では図書館がどうしたらさらに効果が上がるのか今から作戦を練りたい。もう計画されていると思うが、南国市や香美市と一緒に何ができるか。図書館だけではなく、当然これに関連する観光など様々な部局があると思うので、単独でやるのではなく、図書館と一緒ならどんなことができるか、あるいはどんなメリットを私たちに期待するのかを、その関係部局の人たちにも考えても

らう。その成果についてお互いに確かめ合うことによって、最終的には、単純に良かったで終わらせないところへ持っていきたい。

●市町村立図書館等への支援、高知市全域サービスについて

市町村立図書館への支援。今後、オーテピアのサービスがある程度成熟した状態になってくる。並行して市町村立図書館の支援と、分館・分室に力を入れていかないといけない。オーテピアがどんどん先に進んでいくが、その成果をどうやって県と市全体につなげていくか。

昨年、生涯学習課で研修の講師をさせていただいたが、いよいよ市町村の図書館あるいは市町村行政に対して直接語りかけ、奮起を促す場を作り始めている。それとオーテピアがどう連携して、市町村のレベルを上げ、新しい館を作ろうという動きにつなげていくかというあたり。

鳥取県ではその方法というか、セクションのありようが違っている。鳥取県でも以前は生涯学習課が基本的にそういった役割を担い、図書館がサポートする役割だったが、今は生涯学習課からその権限を県立図書館に移してもらって、県立図書館が市町村立図書館の振興などに責任を持つ状態に変わっている。そうした方が良いということではないが、実情を分かってあげられるのは行政ではなく、やはり現場。

オーテピアの県立の部門あるいは市立についても、分館・分室のことを誰が一番分かってくれるかと言えば、やはりそこを振興するセクションの人たちであるはず。しかし、現場の本当のニーズや、どういうふうに変えたら良いのかとことん話をすることは難しいと思うので、そういう意味で高知市全域サービスも含めたこの2ページはこれからとても大切。

中心市街地で、いろいろな取組がされており、良い方向だと思う。この場所に年間100万人の集客力がぼこっとできた。そう広くない土地にオーテピアができたというだけで100万人という数字が叩き出せている。使い方についても、子どもが図書館で本に親しむ、あるいは科学館で楽しむ時間を作って、その間に親が買い物するのは大いにありだと思う。それで駐車場を使われても別に良いと思う。

そういうことも含めて、一緒に何かをするということ。同時に、いかにオーテピアを使って人の流れを作っていくかというあたりを、さらに掘ってみても良いと思った。

＜事務局　議事２説明＞

【委員】

議事2について、ご意見をいただきたい。

【委員】

●行政支援サービスについて

今日は、行政支援サービスに関する展示を見せてもらった。それから、出張オーテピア高知図書館 in 高知市役所の状況や成果を教えていただいた。

行政支援サービスは、行政にとって非常に大事だし、図書館が、県や市に向けて「図書館はこ

んなに役に立つ」と直接訴えかける最も適切な場面でもあると思う。
　まずは、それを個別ではなく、トータルで考えてほしい。行政支援サービスを考えるときに、どんなことがあってどれをどのように組み合わせたら良いのか、それぞれを考えたときにどこがネックになっていて使われないのかというあたりを、例えば、展示を見て展示だけのことを考えるのではなく、全体を見ながらやってほしい。
　その中で、大まかには3つに分かれると思っている。行政が必要とする情報を適切に提供することがまず1つ。これは、政策を考えたりするときの情報提供ということ。
　それから、行政が県民・市民に対して提供しないといけない情報のうち、図書館が行政資料をきちんと提供することによって、県民・市民がそれを土曜日や日曜日あるいは役所が閉まる5時15分以降の時間帯でも受け取り、見ることが可能な状態にしていくこと。最近は、デジタルで情報提供されていることもあるが、デジタル情報もホームページで見つけようとすると案外見つけにくい。そんなときに図書館に行けば、そういったものをすぐに見せてもらえる仕組みで、これが2つ目だと思う。
　それから3つ目は、展示でやっているとおり、行政が今何とかしたいと思っている課題に対して、図書館がお手伝いすることで行政の業務の執行がスムーズにいくような部分。大まかに分けると、この3つだと思う。
　最初の情報提供の部分は、本当に一番引っかかる、難しいところだと思う。行政がなかなか使ってくれない。実は再来月、鳥取県の北栄町でそういった講座をやる。町長、副町長、教育長、課長級を対象に、図書館がなぜ必要か、また、図書館の情報を使わない町は多分駄目になりますよといった話をする。地方分権一括法の施行以降、国、県、市町村は横並びになり、それぞれのところが考えて、各々自分たちでやっていくということにはなったが、頭の切り換えが十分でなく、ついつい情報待ちのような状態になっている行政部局はたくさんある。これだけ変化が激しく、自治体間競争がある状況の中では、情報をきちんと自分たちで得て、それをもとに政策立案をやっていかないと、周りの市町村から見ても遅れを取った感じになり、全国で言うと選ばれない自治体になるのは間違いないといったあたりを中心に話をするつもり。
　去年も別の町で講座を行ったが、徐々にではあるが、また講演をしてほしいというニーズが鳥取県内で出てきている。この内容を課長級にするときには、課長自らが実践してほしいということではなく、あなたの部下がそういう意識を持って情報を集め、あなたのところへ持ってくるようにあなたが指導してくださいねということを伝える。
　行政だけでなく、議員に対してもそうだと思っている。議員も自分の選挙区の問題をそのまま投げるのではなく、図書館でそれが全国的な問題なのか、全国でいうとどれぐらいの件数があるのか、うまく解決したところはないかということを聞いて質問の中に組み込むことによって、ここまで調べてきているんだと、執行部が知らん顔をできない非常に力強い発言をすることができる。例えば、そういうような形で議員もやっていく。それから、行政にも、きちんと情報をもとにして施策を作っていかないと、本当は行政はうまく回らないんだというところを理解してもらいたいし、それを支えるのが図書館だということをどれだけの人が理解してくれるかが肝心であると思っている。その理解があってから、図書館をどのように使うのかという講座を行ったり、出前図書館を行ったり、レファレンスに関するチラシ等を提供したりして、ノウハウ

を伝える。
　行政資料についてもさっき言ったとおり。行政資料を図書館にきちんと出さず平日の5時までに来ないと資料を見せてくれないところが、県民・市民に対して十分に情報提供をやっていますと言うのはおこがましいと思っている。
　そうではなく、図書館にこういうものを提供していますから、図書館の方も把握してください、もし土日に見に来られる方がいたらちゃんと教えてあげてくださいねというのが本筋だと思う。やらないところは手抜きだと思っている。
　行政テーマについては、皆さんも一生懸命やっていると思う。あとはお互いがいかに協力して展示をやっていくか、そして、展示をしたことによる効果をどう理解してもらうか、そのあたりが必要になってくる。例えば、相談会は直接効果が分かる。相談会を図書館と一緒にやったら単独でやるよりもたくさん人が来てくれたとなると、その相談会をやっている部局は、次もまた図書館と一緒にやりたいと思ってくれる。図書館と組むことの良さ、あるいは、図書館の力を感じてもらえるよう、展示だけをやるとか展示の部分だけを見るというのではなく、全体をつなげて、行政支援の全体図を作るというイメージを持ち、誰かがその全体を見たコントローラーになる形で進めていただきたい。

【委員】
●行政支援サービスについて
　一つ重要なことは、上意下達ではなく自己判断・自己責任でやらなくてはいけないのは、行政の世界だけではないということ。（従来の）産業構造が崩壊して、親会社から中小企業、いわゆるグループの下請け会社に対して技術移転や仕事の割り振りもなくなり、中小企業が自立しなければいけなくなっているというのも全く同じ構造。議員も同じで、地方の課題に合わせた政策の公約を出していかないといけない。党本部の言うことを聞いていたら地方の選挙は勝てない。これも同じ構造。それから、今は農家が農協の言うことを聞いていたら駄目だ。3年ぐらい前になるが、自民党が農協中央会の役員を解雇した。中央会が地方の農協をコントロールしていたら、地方の農協が自由に動けず、農家も良い仕事ができない。みんな同じ構造。日本の社会で同じ問題が起きている。だが、末端にいる人たちは、相変わらず上部組織からの指示や命令が来ると思って、口を開けて待っている。そんなことを待っていたら遅れをとってしまう。もう横並びでやっていける時代ではないのに、横並びになろうとして遅れをとることになっているが、そのことにまだ十分気づいていない。日本の社会のあらゆるところで同じ問題が起きている。だから、今まで上部組織が提供していた情報に関して、個別のニーズがあるところへ個別の情報を提供するのが地域の図書館の役割。そこをはっきり意識して仕事をしていただくことがポイントではないかと思う。
　それから、行政支援の場合少しややこしいのは、ビジネス関係、例えば、行政のビジネス系のセクションが地元の中小企業を支援する施策を打つときに、図書館での展示やイベントについて、図書館のビジネス支援の担当はどうするかということ。
　これは健康・医療でもそうだし、いろいろなセクションのところと、行政支援のセクション、それから、個別のビジネス支援、医療情報、障害者、福祉等に関するサービスをやっている図書館

側の各担当との関係を少し整理し、連携してやるということを意識しないといけないと思う。

【委員】
●児童サービスについて
　児童サービスについて拝見した。
　例えば、県立図書館と市民図書館でナンバリングの方法が違うなど、いろいろな前提はあるが、それも良い意味で両立している印象。基本構想のときから言っているが、子どもは二重に探せたら良いのではないか。書名と著者名のどちらでも探せたら良いということもあり、非常にうまくいっていると思う。
　オーテピアにシリーズ全巻があるが、場所が分かれているために片方の場所では1冊抜けているように見えるものはどうしたら良いかという相談があった。どういった方法が良いか分からないが、自分なら木の板を入れて、「どこかにあるよ探してみよう」とだけ書いておく。そんな工夫も児童サービスだったら良いかもと思う。
　よりシリアスな話題としてお聞きしたのは、オーテピアの非常に強力な施策の1つである児童書の全点購入について。学校や市町村の図書館の方に見ていただいくことで、選書の際の利便性を非常に高めるということで全点購入しているが、一方で、市町村の図書館や学校の現場では疲弊というものが出てきてしまっている。
　何度も話題になっていることだが、市町村の図書館で、委託又は派遣の職員しかいない、あるいは（正職員が）片手間にやっているようなところがわざわざここへ来て選書するのか。機会があったとしてもなかなか利用されないといった悩ましいところもある。反面、全点購入をやめてしまうとそうした機会すらなくなってしまうという危惧もある。
　どこかで支えることも大事だと思っていて、高知県図書館振興計画策定委員も務めさせていただき、そこでいろいろ提言したことが、新しい図書館ができたり、図書の購入予算が増えたりという形で、ゆっくりではあるが、少しずつ動いているという点から、今はもう少し粘りましょうと申し上げたい。学校や図書館の児童書の選書を市町村の方で進展させましょうと言ったときに、サポートが弱くなっていてはなかなか踏み込めないというところもある。個人的には、もう少し粘っていくことは大事だが、これをやるのが良いかどうかは分からないところもある。皆さんから意見をいただきたい。
　民間だったらやるだろうと思うのは、選書サービス。30万円で買う2023年度新刊とか50万円コースとか。ここの資料とスタッフなら多分、ベスト30とか50とかの選書は平気でできると思う。それを提供することが良いか悪いかは分からないが、高知市を除くと非常に厳しい状況の市町村や学校の図書館がある。本当に片手間にやっていたり、司書教諭とは言うものの、一般の教員と兼務だったり。そのような方からすれば、ここに来て2,000冊の中から選べと言われるとハードルが高いが、オーテピア（高知図書館）が選んだ15万円コースの選書があれば、そこから選書をスタートできるので、スタートアップは寄り添い型でも良いのかなと思った。本当にやるか、いつまでやるかなど、いろいろな議論があっても良いと思う。

【委員】

●児童サービスについて

私も児童サービスの方と話した。見方はいろいろだが、どんなサービスが必要かというと、例えば、子育て支援を必要とする方がおいでになったとき、本の選書のことなどもあるが、一つはいろいろな相談に乗れるというか、困りごとの解決をしてあげられること。そういう役割を果たせる知識や具体的に対応できることが担当者の方にも必要になってくるのではないか。また、子どもと一緒においでになる保護者の方に対していろいろなサービスを行うことも必要。

子どもが自分で来られるようになったら、図書館にあるたくさんの本の中から自分で選ぶ楽しさを体験させてあげたいと思う。

いろいろ言われているが、小さい頃から文字言語に接することが何と言っても一番大事なことだと思う。英語などは特にそうだが、言葉の習得で、音声言語が非常に優位化されている。だが、実際に我々が大事なことを考え、残し、伝えていくというのは結局、書き言葉、文字。今はネットなどでも情報を音声で調べたり、手に入れたりすることはできるが、基本は文字言語。その文字言語がきちんと理解できて書けることが非常に大事だと思う。一番基本的なところは、幼児期を含めて児童の時代の本との接触の仕方にあるのではないかと思う。そういうことでいろいろな読書の勧めというものを考えてほしい。

いろいろな言語の児童書も、見ていて非常に楽しかった。読めなくても、例えば、絵本であれば内容が分かるとか、こんな言葉、文字もあるんだというように、人間の持つ言語のすばらしさを実感させてくれる。棚にたくさん本が並んでいるのは、子どもにとっては一種の未知の世界の探検であり、ジャングルの探検のようなところもあるので、そういう感覚で楽しく本探しができればと思う。先ほどおっしゃったように、たまたま見つからなくても良いのではないか。そういうことをやってみたことが楽しいといった形になると思う。そういう手助けを陰からしてあげるのが一番大事ではないかと思う。自主的に本に接して、自分で選んで読めるようになるといった成長を助けていくという形になると思う。

また、これは他とも関係するが、図書館に来て本を借りて読むという生活パターンが身についている子は、どれぐらいいるんだろうか。これがなかなか難しいのではないかと思う。家庭に読書環境が整っている児童は、正直言ってそんなに多くはいないと思う。そういう子どもたちに何とかオーテピアで本に接してほしい、知識を身につけてほしい、それがその子の成長に一番役に立つんだというところから児童のサービスも考えていただきたいと思う。

これは図書館だけの問題ではないが、こういう時代に我々は生きている。子どもたちに、図書館に来れば何かが起こって楽しいという経験をしてほしいと思う。

それから、例えば、学校への貸出しなどに関して、これは先ほどもご指摘のあったように、学校側の受入れの態度というか、人員の問題がある。それから、一番大事なのは教員が本を読む気があるかどうか、読書が好きかというという点で、最近は自信が持てない。先生、今月どれぐらい本を読みましたかというアンケートを実施してほしいと思う。それに読んだものを書いて、全てについて短い感想文を書いてもらうようにすると、困る人がいるのではないか。司書教諭に限らず、読書は大切だと、子どもの成長には必ず必要なものだと考えてくださる先生を何とか見つける。図書館側から強いるわけにいかないので、いろいろなところへの働きかけが必要だとは思うが、そういったところから良好な関係を作っていただきたいと思う。

あとは、本をボロボロになるまでいかに活用するか、これに尽きると思う。棚に並べておいて眺めているのが良いわけではないので、ボロボロになるまで使う。そのためには、児童の読書について研究されている方の協力も必要。そういう方の協力、また、支援も適宜行っていただきたいと思った。全体としては、子どもコーナーは非常に楽しいコーナーで、こんな本がまだ読まれているのか、良いことだなと思ったりする。児童書は非常に歴史も深いし、伝統を引き継ぐとか、その文化を引き継ぐという面でも非常に貴重なものなので、そういう面も自然と子どもに分かるような読書環境にしていただきたい。できればすぐ間近に迫ってる夏休みに、何か魅力的な企画を立ち上げていただけたらというのが感想。

ここまで様々な意見が出たが、事務局からコメントがあればお願いしたい。

【事務局】

●行政支援サービスについて

私は行政職なので、行政支援サービスの利用が少ないことを自分に置き換えて反省した。

先ほど、出張オーテピア高知図書館 in 高知市役所の話をさせていただいた。昨年度、手探りで1回目をやり、まだ具体的に話はしていないが、2回目をやるとしたらどうしたら良いだろうという話も出ている。

1回目には、出前図書館を中心に行政支援サービス、レファレンス、データベースの紹介をしたが、他にこういうことをやったら良いのではといったアイディアがあればお聞かせいただきたい。

【委員】

●行政支援サービスについて

今回は、提供できるものをいろいろと見させていただいた。方向性、ベースはそれだと思う。

じっとしていたら、自治体が駄目になっていくのは、もう今の時代当たり前。そのような状況の中で、図書館を活用して情報を取って最終的に企画や施策につなげていく。そういうことを図書館が全力でサポートするという本質的なところをどうやって訴えかけるかを考えてみても良いと思う。その手段がパネルになるか何になるのか今の段階では分からないが、せっかく出かけていくのであれば、誰かが興味を持ってくれる、そう言われてみればそうだねと思ってくれるような材料を提供することだと思う。データベースも本もあり、このような情報を提供できるという図書館の機能を教えるだけではなく、なぜ行政職が図書館を使っていろいろな調べものをしなければいけないのかを伝える。

それからもう一つ、なぜ行政資料を誰でもいつでも、土曜日や日曜日でも見られるようにしておかなければいけないのかを理解してもらう機会としても考える。それぞれの担当では、出前図書館はこういう感じのものという段階で止まってしまうので、こういったことはなかなか思いつかないが、図書館はそこで何を知ってもらいたいのかを全体を見て考えてみれば、展開の仕方が変わってくるのではないかと思う。

【委員】

●行政支援サービスについて

公務員には公務員なりのプライドがあって、行政関係の仕事は自分のほうが詳しいと思っている。自分たちが知っていること以外に必要な知識や情報はない。はっきりそう思っているわけではないが、そんなものがあるのだろうかぐらいに思っている。国や県から下りてくる情報、指示、法令などに従い、行政職員向けの研修会などで配布された資料などに基づいて仕事をしていれば何とかなるというのは、1999年までの委託事務の法律の中で育まれたもので、そこから抜け出せていない方がまだ多い。

だが、既に法律上も実態もそうではなくなっている。片山元鳥取県知事、元総務大臣も論文の中で、国の政策そのものを各自治体は批判的に捉えて、各自治体に合った政策を自主的に作らなければいけないとおっしゃっている。だが、そういうことを本当に思っている公務員がどれだけいるのか。皆さんも何となく、国や県からの太い指揮命令系統がまずあって、そこで大体のことが決まっている、だから図書館から大したことは提供できないと思っているのではないかと思うが、そうではない。今までの上部組織からの指示・命令に代わるような骨太の情報を自分たちも提供できるという自信を皆さん自身が持たないと、何となくおまけで少し役に立てば良いぐらいの気持ちではまずいのではないか。そのあたりが一つポイントとしてあると思う。

それから、先ほど委員長がおっしゃった困りごとの相談ということで言うと、図書館員も実体験をしないと困りごとの相談に乗れない。だから何となく家と図書館を往復して、言われた仕事だけしているということではまずい。繰り返しになるが、指示待ちである人たちに対して、指示待ちから抜け出してもらうように支援するのであれば、支援する側が指示待ちではまずいと思う。

【委員】

●行政支援サービスについて

市役所での出張図書館の続きだが、なぜオーテピアを使うことが必要なのかということは、背景としてはかなり重い話。重い話をしたときに私が最後に付け加えるのは、私は仕事があまり好きではないので、どうすれば楽に楽しく、大きな成果を得られるかをずっと考えながらやってきており、そのためのツールとして図書館がとても役に立つということ。それなら少し手を出してみようかと思ったり、少し部下にやらせてみようかなと思ったりしてくれる。

大きな声で言いたいのは、「あなたが今やっている仕事は、図書館を使ったらもっと楽に良いものができますよ」ということ。

ある意味、今ある本を借りてもらうことよりも、それを出張図書館で伝える方が将来につながる。図書館を使ったら自分の仕事がもう少し良いものになるかもしれない、もっと楽にできるかもしれないと思ってくれる人を何人つくるか、そのあたりに力点を置いて考えてもらった方が良いかもしれない。その方が話もしやすいかと思う。

【委員】

全体的なまとめとして、最初ご指摘にあったとおり、今、この時点で新しい段階に入っている。

成熟という点でも新しい段階に入っている。
　それと、今までのあり方とは違った模索をしていかなければならないという視点。
　合築により2つの図書館が協力して、ユーザー、住民にどんなサービスができているのかをきちんと数値的に把握しておく、これが一番基本だと思う。
　当初から見れば取り巻く環境も随分と変わり、スタッフの能力もアップした。特にIT環境の変化などを考えた上で、サービスをもう一度考える段階に来ていると思う。
　たくさん意見が出たが、これから委員の皆様からいただいた意見を十分に踏まえて、事務局には図書館運営を進めていただくよう、よろしくお願いしたい。
　それでは最後に、議事の3のその他について、事務局の方からお願いいたします。

【事務局】
資料5
今後のスケジュール
10月に令和6年度第2回サービス計画推進委員会を予定している。